

第2回日本フットケア・足病医学会年次学術集会
スイーツセミナー5

PADに対する細胞再生治療

有効性を高めるための最適な患者群の模索 および細胞ソースの検証

12 月 **11** 日(土) 14:30~15:30

D会場(パシフィコ横浜ノース)

座長

澤 芳樹 先生

大阪大学大学院医学系研究科 特任教授 大阪警察病院 院長

演者

三宅 啓介 先生

大阪大学大学院医学系研究科 心臓血管外科

スイーツセミナーは、事前参加登録制です。事前に整理券をご用意願います。
会場内では飲食時を除き、マスクの着用にご協力の程よろしくお願い申し上げます。

共催

第2回日本フットケア・足病医学会年次学術集会
Cell Exosome Therapeutics 株式会社

PADに対する細胞再生治療： 有効性を高めるための最適な患者群の模索および細胞ソースの検証

大阪大学大学院医学系研究科 心臓血管外科
三宅 啓介

末 梢動脈疾患(PAD)は糖尿病の蔓延とともに世界中で増加傾向にあり、その数は2億人を超える。PADの最重症型である包括的重症慢性下肢虚血(CLTI)は下肢切断のリスクが高く、また予後が悪い疾患であることから、game changerとなるべき治療が求められる。CLTIに対する治療は血行再建であるが、一方で、血行再建が不能なほどに動脈硬化病変が進行したno optionとよばれる症例が25-40%存在すると言われており、こうしたno option CLTIに対して再生医療の効果が期待され、遺伝子治療・種々の細胞治療といった様々な治療ソースが試みられてきたが、臨床的なエンドポイントを変えるほどの効果は得られていない現状にある。この原因の一つとして考えられるのは対象患者の選択である。再生医療の組織再生メカニズムの中でサイトカインは非常に重要な役割を果たす。しかし、こうしたシグナルが影響をおよぼすのは、患者の持つ幹細胞・前駆細胞といった種々の細胞群であり、動脈

硬化性疾患および加齢に伴いこうした細胞は増殖能力を失っていく。そのため、ターミナルステージに相当するno option CLTIにおいては細胞の劣化から、高い再生能力を期待することは困難と考えられる。また、CLTIはそのものがフレイルと言えるほどADLが低下している症例が多い。身体活動度が生命予後に影響を与えることは知られており、このことから、ADLを維持、あるいは改善することなく患者予後を変えることは困難であると考えられる。

今回の発表では、無症候性PADの問題点、さらにフレイル、潜在性重症下肢虚血等の問題点に焦点を当て、至適な再生治療のターゲットを検討する。さらに、効果の高い細胞治療ソースとして、臍帯由来間葉系幹細胞を用いた前臨床試験での結果を提示し、今後の展望に関して発表したい。